

法政大学史学会通信 第一号

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学史学会通信 / 法政大学史学会通信

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

10

(発行年 / Year)

1962-12-01

法政史学会通信

第一号

昭和三十七年十二月

今般「法政史学」第十五号が特集として大部なものが発刊出来ましたが、その前身は「法政大学史学会々報」でありました。その後史学科、史学会の発展成長にともなつて学術雑誌としての歩みを進め、論文が充実してくるにつれて会報的な要素が紙面の都合で充分にとれないという喜ばしくも困つた状況を呈して来ました。そこで今回から表題の様な「史学会通信」も併行して編集・発行することになりました。

まだ内容も当面思いついた項目にとどまっています。が会員の交流の場として大いに活用していただきたいと思っています。

藤井甚太郎先生を思う

石 渡 隆 之

もう授業時間がきているのにどういふわけかその日に限つて教室には私一人しかいなかった。私は弁当をひら

いていた。そこへ先生がみえられたのであわてて箸を置く。すると先生は「どうぞゆつくり」と、他の学生の集まるのを待つ意味をも含めて私の食事を促がされた。やや急ぎ気味の食事を終え、先生と雑談小時、依然として学生はこず「ではぼつぼつ始めますか」の先生の言でノートをひらく。先生一人に学生一人という講義（私にとつてはそれだけに思い出の深い講義）が始まつた。驚いたことに先生の声、態度、それは大勢の学生のいるときと少しも変わらない。講義の第一声のあまりに大きいのに私のほうがとまどつたくらいだった。講義は先生御得意の明治維新史、外国船がしきりにわが国に出没する件りでした。やがて学生も一人入り（渡辺省三氏（現大妻女子大学在職））、二人ふえ、講義の中頃にはほぼ教室は満員近くなつた。その間先生の講義は学生の数によつて少しも変わることもなく、終始一貫朗々として、あたかも名調子を楽しまれておられるような様子だった。あれから十数年、どういふわけかそのときの情景が今も鮮や

かによみがえつてくる。

史学創立十五周年にあたり、もし先生が現在まで御
壮健でいられたら、と思うのは私の感傷だろうか。

〔旧制一回〕

研究室における板沢先生

安岡 昭男

廊下の足音で板沢先生だとすぐわかる。さすがに晩年の先生のそれは引きずるような靴音であつた。いよいよお出ましと緊張する。実際先生の在室されているうちは、談笑の間でも心の張りが解けず帽子をかぶり、ステッキを手にして室外にお出になると、とたんにこれがほぐれたものである。この二つが衝立にぶらさがつている間は、お姿は無くても出講中であつて、全面解除というわけにはいかなかった。やはり先生にはその存在だけで無言の威圧を与えるだけの迫力があつた。しかし、研究室勤務の者としては有難過ぎることもあつた。

毎週金曜日、大学院博士課程の一对一乃至二の講義演習が済んで、二部の授業が五時半に始まるまでの一時間ばかり、先生は大学院六階のご自分の研究室に上られず、いつも第二号年館の史学研究室と一緒に来られ鎮座しますのであつた。折角個室があるのにと、いささかうらめしく、閉口しながらお茶をさし上げたものであつた。

研究室では新着の紀要雑誌類をとりあげ、必要なこと

を手帳に書きとめられたり、新聞に目を通されたり、とにかくその辺に展示しておく新刊案内でも書評でも、手当り次第であつた。その点一番張り合ひのあるのが板沢先生で、こちらまでできるだけ新陳代謝をと心がけねばならなかつた。こんなものが来ましたと、つとめて新収の文献を御覧に入れたが、何よりなのは古文書であり、正に猫に鯉節という体であつた。講義から戻つて来られてからでも、学生の請いに応じて、史料講解を共にせられ、「お、もうこんな時間か」とバスがなくなつてしまうことさえあつた。とにかく先生と二人だけの時には、先生が熱中されるような好材料が提供できるか、または先生本来の談論風発を誘い出すような第三者が入来することを欲迎したものである。

先生は未来への前進をということで、過去はあまり語りがたがなかつたが、土曜の夕方の先生一同の会食時など、例によつて和やかな空気の中で、興に乗ると大いに話がはずみ結構思ひ出話が尽きないものであつた。

眼鏡をツイとあげて文献に眼を近づけて、するどい眼差しで行間を走らせるあの印象的なお姿とうつて変つて、幼稚園にお通いのお孫さんのお話をされる時の先生は、まことに好々爺というほかなく、室内の空気をなごませるものがあつた。お嬢ちゃんも、良いおじいちゃんやまが亡くなられて、心なしか淋しそうであつた。

(昭和三七年十一月一七日記) (博士課程)

近況報告

酒巻正三郎(新制三回)

私は大学院(修士課程)をでてから、東京と地続きの草加、越谷地方で中学校長や地教委教育長をしていたが、昭和三十三年四月一日付で十三年間の義務制校長生活と別れて県立行田高校定時制主事(夜間部準高校長)になる事になった。とたんに日教組脱退組から担がれて埼玉県独立高教組中央執行委員長に祭りあげられてしまった。引受けた以上は、日本教育正常化の為に頑張らねばならぬと思い全国十四県会議の同志と固く相結んで夢中になつて非専従委員長として、余暇の全時間を教育の政治的不偏中正を護りながら、高校教職員の経済的、勤務条件的待遇の維持、改善、向上の為に使つて来た。所が此の四月、突然高校生急増対策で創設された県立草加高校長に任命されてしまい、又々五ヶ年三億五千万円計画で校地設定、校舎建築等を中心とする創設事業と昼夜兼行で四つに取組む事になつたのである。勿論普通課程に於ける全県的モデル校建設を夢見ての前進過程なのである。そんなわけで史学研究も旺盛なる熱意を持ちながらも仲々に拂らず、博士課程では受験してみたものの、月例研究会にも出席致しかねる様な状態で、これと云う研究も出来ず、僅に建武中興の社会経済史的研究を細々と続けているに過ぎないので誠に全身に汗する思いである。今迄に研究発表したものは、「回教曆紀元元年」「院政

政權史論」だけである。

(昭和37・6・27記)

近況

卒業后小学校勤務のかたわら、『吾妻鏡』と『玉葉』の人名索引の作製に蝸牛の歩みをつづけてきた私。水害や愚妻の病氣のため完成がだいぶおくれたが、本年やつと『吾妻鏡』前編(国史大系三十二巻)の脱稿も間近。

尚卒業后サンデーヒストリアン(最近になり封建社会研究グループと改称)の同人となり、同人十数人と共に芥川氏を中心に封建社会研究にとりくんでいる。

現在一番考えていることは、学問研究の学徒にとつての最大の盲点「金」をためることに専念中。サラリーの二、三倍はアルバイトでかせいでいるが、五十位までには一千万円位もつてみたいと夢想中。つんでみてからのオタノシミというところ。

氏名	吉川敏夫
専攻	東洋史
勤務先	横浜市立矢向小学校
卒業年次	昭和三十年新制五回

近業・消息

最近の研究論文

安岡 昭男 (博士課程)

『国際政治』(日本国際政治学会編)「日本外交史研究・幕末維新時代」(昭35・12)に「幕末の小笠原諸島をめぐる国際関係」を、同じく「日本外交史研究・日清日露戦争」(昭34・4)に「日清戦争前の大陸政策」を発表。

松尾 章一 (博士課程単位取得修了)

○六月三日(日)日本近代史学会大会(於明治大学七号館)において「立憲改進黨小論」を発表。

○『特命全權大使米欧回覧実記』年譜(紀日本近代史学四号 昭35・9)

「急進的士族民権運動家の半生」 「敗將軍」 福井 孝治の思想と行動」(日本歴史一四四号・昭35

・6)

「星 亨」日本人物史大系(6)近代Ⅱ(朝倉書店・昭35)

片桐 一男 (大学院博士課程)

○「蘭学者名簿作成について」(蘭学資料研究会研究報告 第四八号 昭34・7)

○蘭学者名簿稿Ⅰ 著訳書を持つ蘭学者名簿 上・下(蘭学資料研究会発行 昭35・4)

○「静嘉堂文庫所蔵大槻家旧蔵蘭書考」(蘭学資料研究会研究報告第七一号 昭35・10)のち特殊文庫連合協議会発行 文献第四及五号 昭35・12、昭36・6に同一題目で増補発表。

○「輸入蘭書目録稿」(蘭学資料研究会研究報告第七五号 昭35・12) 共同発表。

○「金沢藩壮猶館旧蔵蘭書目録稿」(蘭学資料研究会研究報告 第九六号 昭36・10) 沼田次郎氏と共同発表。

○「蓬左文庫所蔵尾張洋学館旧蔵蘭書」(蘭学資料研究会研究報告 第九八号 昭36・11)

○「京都大学図書館所蔵蘭書目録」 新宮・山脇・江馬・高橋家旧蔵本 附、小石家所蔵蘭書目録

(蘭学資料研究会研究報告 第一〇〇号 昭36・12)

○「蘭医森田千庵とその資料および蔵書」(越佐研究

第一八集 昭37・3)

「『太田重隆重局方』と森田千庵」(第四回蘭学資料研

究会大会 於京都大学 昭37・3・13に発表、のち蘭

学資料研究会研究報告 第一一一号 に収録)

○「箱館戦争史料について」(日本歴史 第一七〇号

昭37・7) 法政史学掲載論文は除いた。

桜井芳郎(新二院一回)

明治維新変革期における騒擾事件について

武蔵野文化

(昭和三十四年度)

2 武蔵野新田の水利と水車

武蔵野文化

(昭和三十五年度)

3 江戸時代天領下における御栗林の研究

歴史科学(昭和三十六・三十七年度)

4 江戸時代天領下における井口家文書について

武蔵野文化

(昭和三十七年度)

5 江戸時代天領下における御鷹場の研究(未発表)

寺沢茂(新三、院三回)

歴史教育者協議会編『教師のための歴史』(河出書房新

社 昭37)に同会東京・中学校部会の一員として分担執筆。

佐藤司(院四回)

「北海道拓殖銀行法の制定過程」(拓殖論叢五 昭35・

3)

丹治健蔵(院五回)

「利根川舟運の展開 上州平塚河岸の積荷をめぐる

て」(歴史地理九〇ノ一 昭36・6)

渡辺康昌(院六回)

日本印度学仏教学会学術大会 昭和卅七年五月二〇日

「近世曹洞教団の形成過程」 1. 伝法公事を中心

として

鶴の林十一月号(鶴見女子学園発行)

「近世の曹洞宗について」

大森実(院八回)

板沢武雄「日蘭文化交渉史の研究」昭和34年を紹

介 「科学史研究」第53号

2 遠藤元男「科学史について」(日本歴史34号昭和34

年8月)を抄録 「科学史研究」第54号

3 日本科学史学会関東支部委員に就任 昭和37年2月

帆足万里述勝田季鳳筆「窮理小言」について 研究

発表 科学史学会関東支部大会 昭和37年2月

5 志筑忠雄の「求力論」について 昭和37年4月

蘭学資料研究会にて報告

6 J. F. Fulton: A Bibliography of the
HONOURABLE ROBERT BOYLE/96/
の書評 科学史研究 68号

7 帆足万里述勝田季鳳筆 「窮理小言」について
一 曆象新書との関連を主として
を投稿 「科学史研究」68号

星野良作 (修士課程)

「日本上古史研究」通巻五七号に

「書評」龜田隆之氏著『壬申の乱』を発表。

右同誌 通巻第六四号に

「書評」直木孝次郎氏著『壬申の乱』を発表。

芥川竜男 (旧制一回)

発表論文(口述発表・書評等はのぞく)

○武蔵国橋本郡篠原村宗旨人別改帳に就いて

法政 二高歴史研究 第四号 昭二九・一〇

○江戸近郊に於ける鷹場をめぐる諸問題

一 特に鳥見役の性格を通じて見たる一

地方史研究 一六号 昭二九・一二

○戦国大名への契機としての二階崩の変

一 大友義鎮(宗麟)研究覚書一

法政史学 第七号 昭三〇・六

○九州に於ける惣領制の変質過程

一 文永・弘安期の志賀氏一

法政史学 第九号 昭三二・一

○城下町研究の動向

法政 二高 歴史研究 第九号 昭三四・三

○豊後大友氏研究覚書一 大友義統を諫むる連署状案の分析一

研究と評論 2 (昭三四・四 法政二高紀要)

○越後村上地方史料採訪報告

研究と評論 3 昭三四・十一

○越後村上藩における一神官の存在型態

一 『啓斎翁日誌』の分析より見たる一

研究と評論 4 昭三五・四

○越後村上藩における社会生活の一断面

一 鳴物音曲停止令と落書禁止令一

法政 二高歴史研究 第一〇号 昭三五・三

○惣領制の崩壊一九州を中心として一

歴史教育 八巻八号 昭三五・八

○越後村上藩における社会生活の一断面(承前)

法政 二高歴史研究 第十一号 昭三六・三

○大山信仰調査の覚書一付・史料紹介一

同 右

○田北学編 大友史料 第壹輯 人名索引稿

研究と評論 45 昭三六・五

○歴史地理学関係文献目録(一九六〇・一一一二)

中島義一氏と共編

『流通の歴史地理』歴史地理学紀要Ⅲ

日本歴史地理学研究会 昭三六・五

○鷹場について 法政女子学園年報Ⅺ 昭三六・七・

二二

○田北学編 大友史料 第二輯 人名索引稿

研究と評論 46 昭三六・十一

○「大友氏奉行人年表」補遺 日本歴史 第一七三号

昭三七・十

勤務先

法政大学第二高等学校

近況

昨年一年間、私学研修福祉会より国内研修生として、

中央大学大学院で、森克己博士の講座に入り、日本中世

貿易史の特講と、園太暦講読のゼミに参加した。本年は

九月～十一月の間、法政二高から内地留学として、大分

大学、九州大学に行き、大友氏及び九州史関係の史料採

訪と、『大友史料』編纂者である田北学先生の御指導を

受け、『大友史料』の原史料を実地に見、カメラに収め

て来た。なお久留米、柳川、大牟田方面では同窓の西田

豊氏、新藤東洋男氏、福岡県浮羽郡では同じく佐々木高

信氏他数名の同窓諸氏に多大なる御世話になり予期以上

の成果を挙げることが出来た。

なお右の諸氏は筑後史学会の重要メンバーとして活躍

中であることをお知らせしておきます。

村上 直 (旧制二回)

〔発表論文〕

家康と大久保長安 日本人物史大系3 (近世ノ)

昭和34年6月 朝倉書店

江戸時代初期の代官 歴史教育第七卷十一号

昭和34年7月

大久保石見守長安と甲斐 甲斐史学第一〇号

昭和34年4月

武田家臣団の解体と蔵前衆 日本歴史第一四六号・一

四八号 昭和35年8・10月

徳川氏の甲斐経略と武川衆 信濃 第一三卷一号

昭和34年7月

幕府創業期の奉行衆 日本歴史第一六〇号

昭和34年10月

甲斐における刃境武士団について 信濃

第一四巻第一・二号 昭和37年ノ月

関東幕領における八王子代官 日本歴史第一六八号

昭和37年6月

(川崎市上小田中一六〇五)

三十七年度文部省科学研究費の奨励研究として

「近世幕領における代官支配に関する研究」(三万円)

決定

村井 忠雄(新一回)

『石井』(石井廃寺址調査報告・利包及内谷組合式石棺の研究)に分担執筆(吉川弘文館昭和37刊)。人類科学一四号(九学会連合・昭和37・3)に「佐渡における彌生文化と古墳文化」を分担執筆。(東京国立博物館学芸部)

新藤 東洋男(新六回)

○大久保利謙編『図説日本歴史』?「日本文化の近代化」に小西四郎先生と分担執筆。

○日本歴史第一三七号に「通信教育制度の誕生」明治前期における法律学教育の普及

同誌第一七四号に

「福陵新報と玄洋新報」を発表。

「通教出身者」

() 内は卒業年月、勤務先

湯 本 軍 一

(昭三四・三 長野県下高井郡山ノ内町立東中学校) 信濃十三巻五号(昭36・5)に「鎌倉末ノ南北朝期信濃における在家の動向」

原 田 卓 雄

(昭三二・九 山口県美爾教育事務所)

山口地方史研究四号(昭35・10)に「長州藩における西洋学の採用」を発表。

小 島 俊 次

(昭二八・三 奈良県教育委員会事務局文化財保存課)

川 岸 宏 教

(昭三三・三 四天王寺学園)

四天王寺学園女子短期大学紀要Ⅲ(昭36・10)に「初期の四天王寺別当について」同Ⅳ(昭37・4)に「四天王寺御

手印縁起の出現前後」を発表。

田口勝一郎

(昭三一・九 秋田市立四ツ小屋中学校)

歴史評論一三六号(昭三六・一二)に「大逆事件の反響」

秋田県の諸史料を中心として」を紹介。

金子 和 正 (天理図書館司書)

ビブリオ46.23 (昭三七・一〇)に

「欽定武英殿聚珍版程式」を翻訳紹介。

前川 明 久

(院三回 東京都立小山台高等学校)

古代文化 八一(昭三七・一) 八一三(昭三七・三)に

「馬具出土の古墳級分布よりみた大和政権の騎馬戦力」

日本歴史第一七二号(昭三九・九)に

「ヤマトタケル白鳥伝説の一考察」を発表。

消 息

※竹内先生は法政大学第七回留学生として、来春四月か

ら約一ケ年の予定でヨーロッパ各地に滞在される。とくにイタリヤではモンテ・カシーノ修道院で僧侶と起居を共にされる由である。

※故板沢先生のご担当科目のうち、大学院の講義演習は岩生・丸山両先生が、学部の日社会経済史(金工)は丸山先生、日本仏教史(木丑)は笠原先生、日本史演習(木工)は安岡講師(六月兼任)がそれぞれ代講。

今 村 勢 子 (新六)

さる二月から一ケ年間、ニューヨーク大学およびジェムス・スーリン病院で看護婦インターン勉強のため渡米。在米中の住所は Central Nurses Residence, Welfare Island New York / 7, N.Y.

織茂敏子(通教三三・九卒)

前と同じ埼玉県本庄市立旭中学校勤務。

(近況)郷土史を研究中。

「転勤・就職」

越 川 薫 一 十 二 足立社会保険出張所
土 屋 ミ サ オ 十 二 江東区立豊洲小学校

洞井 浩 院 私立愛国学園（江戸川区小岩

町）

上原 栄子 修二 横浜市立松本中学校

松岡 武 一 川真田化学工業株式会社

飛岡 久 通教卒 北海道河西郡中札内中学校

吉田 悠紀雄 " 私立尾張学園（名古屋市瑞穂

区）

投稿規定

内容 特に限定しません。例えば住所・勤務先の変更・
慶弔など。その他随想、史料紹介、史料採訪報告、近況、
近業など気軽に御投稿下さい。

形式

内容は右の通りですが、編集上用紙は必ず原稿用紙を用いて下さい。なお史学会通信原稿であることを明記して下さい。

送先

東京都千代田区富士見町三ノ一

法政大学文学部史学研究室内

法政大学史学会

発行

年二回の予定。

あとがき

とに角御覽の通りの会報が出来ました。内容など不充分な点が多々あると思いますが、今後を期して充実したいと思います。会報のまえがき、投稿規定にも記しましたが会員の皆さんの絶大な協力を期待してやみません。

編集委員

芥川・安岡・片桐

昭和三十七年十二月一日 発行
法政大学 史学会 編・刊